

# ニッポン 海軍秘録

写真と文／平間洋一（元海自補）



ファーストダンスの著名者。これも重要な職務の一つではある



当時のチリの新聞に掲載された「かとり」TV3501による礼砲発射の瞬間。全国紙にこれだけ大きく出たことからも、その歓迎ぶりが分かるだろう

## 南米での思い出

昭和157(1982)年度の北米と南米西岸の遠洋航海で、私は首席幕僚であった。この遠洋航海で思い出に残るのが、ペルーのグアヤキル港での「かとり」艦上昼食会だ。この昼食会は恐らく帝国海軍、海上自衛隊にも例のないものではなかったか。

この遠洋航海最大の懸案事項は、当時20年間に7万人を殺害した毛沢東主義者の超過激派センデロ・ルミノソのゲリラ活動が続いており、練習艦隊のペルー寄港が危ぶまれていたことであつた。特に練習艦隊寄港の10日前、ペルーでは8月20日に非常事態宣言が発令され、寄港するか中止するかを海上幕僚監部と調整しながら

パナマを後にした。

非常事態宣言発令3日後、ペルーの青木盛久大使から電報が入った。当国のペラウンデ大統領は軍艦で食事するのが趣味で、昨年はフランスの練習艦「ジャンダーク」を訪問し、艦上昼食会を実施している。「かとり」でも、ぜひともお願いしたいというのだ。非常事態宣言が発令されているのに、「昼食会? ふざけるのではない」とは思ったが、米賓は大統領、上院議長、外務大臣、海軍大臣、海軍総司令官などそうそうたる面々である。さらに青木大使からは「20日に非常事態宣言を発したが、当国海相カルバハル中将は練習艦隊の寄港には支障をきたさないと本使に語っている」「ペルー海軍としては練習艦隊が停泊中、カヤオ港を海上および陸上の双方から、

警察と協力して十分に警備する」「さらに大統領を昼食会に招く行事を含め、本艦隊の入港を友好関係の画期的な行事として、ぜひとも成功させたいと本使に語った」などの電報が入った。

こうなつては寄港せざるを得ない。ペルーには大勢の日系人がいるので、「やるしかなからう」となった。海幕長へは司令官から「現在までの知り得た情報(大使館・米南方軍・商社・新聞)から

判断すると、今回の非常事態宣言はペルーでは常態であり、警備に留意すれば寄港は特に支障なしと判断し、寄港する」との電報をしつぱし打電した。

すると折り返しペルー大使館から、「メニューには和食の感じを出していただきたい」とか、「生ものは困る。食後のフルーツもデザートも食中毒が出たら困るので缶詰に」とか、細かい依頼が入り大騒ぎとなった。それより問題なのは、大統領来艦時の警備要領である。警備対策にはゲリラ対策だけでなく、大統領に不満を持つ陸軍のクーデターも考慮しなければならなかった。クーデターの場合には日本政府がいずれの政権を支持するかで練習艦隊の対応も変わり、予想困難である。その対処策は極めてデリケートな問題なので、大統領などの引き渡し要求には日本国政府と協議して応じることにし、ゲリラが大挙押しかけ、大統領などの引き渡しを要求されたら、護衛艦の艦内は治外法権であり日本の「国土」であると、大統領一行を乗せたまま前進一杯で港外に出港、脱出し、領海外に出ること以外に対策は立てなかった。

このゲリラというのは毛沢東派のセンデロ・ルミノソと呼ばれる過激なゲリラである。もし船に乗り込み自爆したら、大統領が狙撃され銃撃戦が始まったら——などなど、心配事はつきない。ゲリラについてあらゆる対応を考え、それに応じた「不慮事態対処要領」を作成、艦外の警備は国際条約に従ってペルー海軍と国家警察軍に任せ、警備連絡係として警務官を実弾持参で国家警察軍司令部に派遣した。一方で艦内への大統領特別警護員の乗艦は1名に限定し、武器の携行は禁止するなど、「国土」の一部である護衛艦の威信の確保に努めた。

「かとり」艦橋には警備本部を開設し、指揮系、情報系、降戦隊系など3回線の通信系を準備し、前甲板、艦橋、後甲板などに防弾チョッキを着用させた警備員を配備するとともに、2名一組の巡回警備班も編成した。また、「かとり」外側の「あさぐも」士官室には24名の完全武装の臨時降戦隊を待機させ、機関も直ちに出港できる体制をとる。

しかし、細かく詰めていくと、非常事態発令中に礼砲を発砲してよいのか、大統領に栄誉礼を行うときは動かないので狙撃されやすい、栄誉礼実施場所を陸上から艦上に変えた方がよいのではないかと、さらに港内に武装した内火艇を走



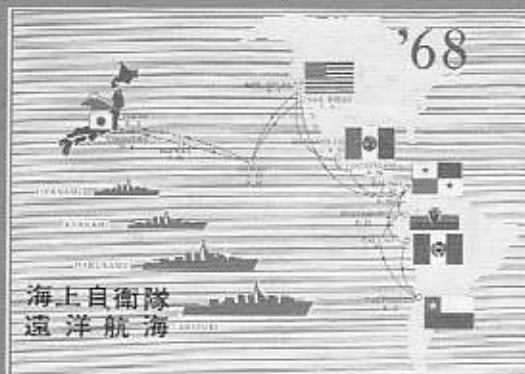
艦内巡視のペラウンデ大統領(右端)とチリ海軍参謀長(左)を迎える田辺司令官(中央)。背景に見える有人の運搬砲塔も今は見ることのない装備

## 南米歴訪の練習艦隊

第6回

# 戻つねり士官と 史上空前の艦上昼食会

海上自衛隊の幹部候補生は、幹部候補生学校を卒業後、練習艦隊乗組となり、各国を歴訪しつつ訓練に従事する。昭和57年度練習艦隊は、北米と南米西岸の遠洋航海だったが、当時の南米諸国はさまざまな問題を抱えていたのである……。



らせ、アクアラングを装備した水中処分隊員を配備し、機関は30分待機で大統領を迎えた。

### 献立と会食の迷託

会食はまずメニュー作りから始まったが、刺身がダメとなるといかに加熱した料理で和食の美しさを発揮させるか、炊事員長からは「和風の艦上昼食会は想定外です。食材も飾り付けもありません」と言われてしまった。そこで「分かった分かった。不足品のリストを作れ、入港後日系人会に依頼しよう」「日系人が95,000人もいるペルーだ。どうにかなるよ」と激励し、入港後直ちに炊事員長を大使館員とともに市内の日本料理店に行かせ、日本料理独特の飾り付けや食材を調達した。

さらに前菜は、飲み物は酒かワインか、食後のティーは、お茶かコーヒーか、それとも紅茶かなどなど、ペルーの食習慣に合わせた料理にしなければならないので一つ一つが問題であった。結局、最初の乾杯は日本酒とし、杯、徳利、箸置き、おしぼりなどを並べて日本料理の雰囲気を出し、料理はスープとともに茶碗蒸しを出し、肉料理と魚料理の間に天ぷらを出した。

メニューの次の問題は食事の会話だ。艦隊にはスペイン語が話せるのは外務省のドクターとして南米に3年ほど勤務し、その後海上自衛隊に入隊し乗り組んできた医務長の古永卓見二佐だけ。ペルー大使館には2名しか通訳がおらず、大使と司令官に張り付いたら、あとはスペイン語ができない者ばかり。そこで大阪外国語大学でフランス語の研修時に、スペイン語の初級クラスに半年間毎週1回2時間ほど出席しただけの私が、孤軍奮闘することになってしまった。

しかし、これは簡単であった。最初に相手に質問し、回答が終わると次の質問を別の人に次々に投げかけると、そこは話したがり屋のラテン民族なので大成功、何を言っているのかはあまり分からなかったが、昼食会は盛り上がった。ところがデザートでピワの缶詰を出したところ、「これはおいしい。なんという果実か、今まで食べたことがない」と聞かれ、順調に進んでいた食事は大混乱。通訳に聞いたり、スペイン語や英語の辞書を副官に引かせたりもしたが、英語にもスペイン語にもピワの単語はない。結局訳しきれず、最後は「ジャンニーズ・ビーチ」との迷託で逃げたが、みんな納得したようであった。

### チリ大統領令嬢の来艦

ペルーとともに問題の訪問国はチリであった。クーデターで左翼政権を打破したピノチェット大統領が独裁政治を行っており、自由圏諸国の海軍は寄港を見合わせていたのである。かつてチリ海軍は日露戦争の折、中立違反をしてまで巡洋艦エスメラルダ(日本名「和泉」)を輸出してくれた。赤沢駐チリ大使は、この恩義からも寄港すべきであると強く主張され、結局チリのバルパライソにも寄港することになった。前年にはフランスの練習艦「ジャンゲーク」が、本年はドイツの練習艦「ドイッチュランド」が寄港せず、アメリカ海軍との共同訓練も拒否されていたチリ海軍は、クーデター後自由圏初となる日本艦隊の訪問を、全艦隊で出迎え、共同訓練を行った。日本大使の練習艦隊歓迎パーティには大統領の令嬢も、首都のサンチャゴからバルパライソにやってくる参加した。

ラテン系のフランスや南米の国では歓迎会にはダンスが付き物であるが、礼儀としてファースト・ダンスは司令官がホストのご婦人に最初のダンスを申し出て踊らなければならない。それなのに、田辺元起司令官は「俺は無骨者だ。社交はセサ(先任幕僚)の任務だ」と断ってこない。そこでセサ殿(筆者のこと)が最初のダンスを踊ることになったのだが、チリのピノチェット大統領のお嬢さんは大柄で背も高く、私が踊っているのを見ていた実習幹部は、「松の木に蟬がとまっているようで、同僚ものだ」と非難した。南米遠洋航海の場合には、首席幕僚の身長を基準に測るべきではないだろうか。

一方、艦上パーティに参加する偉い人の奥様はおおむね年寄りが多いが、接待に当てる若い実習幹部はどうしても妙齡の美人には親切にし、近づくと、お年寄りは相手にしない。そこで私は艦上パーティ前に接待に当たる実習幹部を集め、「偉い人の奥様はおばあさんであるが、国際親善上極めて影響力があり、重要である。不美人はチャヤホヤされていないので、親切にするとたやすく親日派になる。諸君は男芸者になったつもりでパーティに臨み、日本の



戻つねり係が活躍する艦上レセプション。チリとの友好にも大きく貢献できたのではないが



チリの大統領令嬢にて。左から日本人会会長、司令官、大統領令嬢と大使夫妻、そして筆者

未来が諸兄の挙動にかかっている」「サー、ばばあから踊れ、プスから踊れ、今日も男芸者だ。御国のために頑張ろう」と復唱させてレシービング・ラインに付かせていた。

ところが、である。やはりどうしても実習幹部は若い美人の周りに集まってしまう。そこで若い美女とばかり話している実習幹部の尻をつねって注意する「戻つねり係士官」を任命、先任幕僚は「あいつの尻を」「あの実習幹部を引き離せ」と指示を飛ばしていた。このお陰であろうか、いずれの寄港地でも実習幹部は好感を持たれ、「実習幹部の態度が実にすばらしい。日本にはすばらしい未来がある」と参加した政府の高官や軍の指揮官が褒めていたと聞いた。こうして練習艦隊の逆ハニートラップ作戦、「戻つねり戦法」は大成功に終わったのである。

チリ海軍との洋上給油訓練。給油を受けているのは練習艦隊の「あさぐも」DD115

